



鳥になった
小さなおばあさん

1979年頃

その村は、幸福のかたまりでした。

寒くて雪の多い冬を嫌うひとは誰もいませんでしたし、
暖かく優しい春を、みんなで迎えました。

夏は湖へ、秋は森へ、みんな仲よく出かけました。

この村に幸福でないひとは、ひとりもないようでした。

ところが、村の中心の一本道をまっすぐ行ったところの
小さな山の上に住んでいる、小さなおばあさんは、
幸福ではありませんでした。

だからといって、不幸ではないのです。

そのおばあさんは、小さな古い家に住んでいて、
村の祭りや行事には、必ず顔を出しました。

ほかのひとたちと同じように、冬を嫌わず、春を迎え、
夏は湖へ、秋は森へ、毎年行きました。

そればかりでなく、月に1回、チーズやバターやパンなどを
売るために村に下りてきます。

おばあさんは村の人々が好きでしたし、村の人々も
おばあさんが好きでした。

それなのに、おばあさんは幸福ではなかったのです。

なぜでしょうか？

村の人々は、いつも寂しそうな小さなおばあさんを
元気づけようとしましたが、原因は さっぱりわかりませんでした。

小さなおばあさんも、はじめは、なぜ自分が幸福でないのか
わかりませんでした。が、ときが経つにつれて、
だんだんわかってきました。

村の人々には家族がありますが、
小さなおばあさんは ひとりぼっちなのです。

だから、寂しくて、幸福にはなれないのです。

とても暖かい春の日の午後。

寂しい小さなおばあさんは、パンとミルクの簡単なお昼ごはんを
済ませ、窓辺の小さな揺り椅子に腰掛けました。

暖かい春の風は、小さなおばあさんを包み込み、
眠りに誘いました。

そして、おばあさんは、30年前の本当に幸福だった時代へと
戻っていきました……

そのころ、小さなおばあさんは、若いおかあさんで、
ひとりの娘がおりました。

おかあさんと娘はよく働いたので、たくさんのお金を
貯めることができました。

ふたりはそのお金で、きれいな家を 国の中心に近いところに
建てました。

そこでふたり仲よく暮らしていましたが、ある日突然
娘さんが重い病気にかかり、亡くなってしまったのです。

おかあさんはとても悲しみましたが、娘さんが亡くなって
2年ほど経つと、一生懸命働きはじめました。

忙しいと、なにもかも忘れてしまうからです。

一生懸命働いたおかあさんに お金がたくさん来ましたが、
いつのまにか 若いおかあさんは、小さなおばあさん
になっていたのです。

おばあさんは 思い出の残る きれいな家を去り、
幸福のかたまりの村に来ました。

そして、今の寂しい生活になったのです……。

ちょうど このとき……

優しい春風に乗ってきた菜の花の花粉が顔をくすぐり、
小さなおばあさんは 目を覚ましました。

時計を見ると3時20分前です。

おばあさんは おなかがすいていませんでしたが、
村の古い日課に従い、地下室からケーキ用の小麦粉を取ってきて
パンケーキをつくりはじめました。

庭で食べてみたくなったのです。

小さな家の小さな庭の白いテーブルに、
ふっくらとしたパンケーキとしぼりたてのミルクがのり、
白い椅子におばあさんが座ると、ちょうど3時の鐘が鳴りました。

おばあさんが庭の花を見ながら おやつを食べ、パンケーキの
粉くずを捨てようとしたとき、小さな白い鳥がやってきました。

おばあさんが 鳥のために 粉くずをテーブルに撒き散らすと、
鳥は喜んで食べました。

嬉しくなったおばあさんが 台所から持ってきたチーズも、
鳥は残さず食べました。

テーブルにこぼれたミルクを少し飲むと、
鳥は空へ飛んで行こうとしましたが、
ふと おばあさんの方を振り向き、

小さなおばあさん、
私と一緒に大空へ飛んで行きませんか

というような目で、問いかけました。

おばあさんが、

ああ、鳥になりたい。鳥になりたい。

と思っとうなずくと、小さなおばあさんの姿は消えて
小さな白い鳥になっていました。

さあ、行きましょう。

2羽の白い鳥は、大空へと飛んで行きました。

あとに残ったのは、鳥になった小さなおばあさんからの
手紙だけでした。

村のみなさん、長い間 どうもありがとう。
私は白い鳥になりました。

もうみなさんに会うことはないでしょう。

でも、お待ちしております、あの場所で。

春の風がさわやかに流れて、花びらが1枚、
空へ舞いあがっていきました。